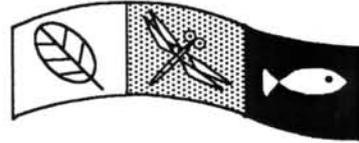


Rio



リオ ～豊田市矢作川研究所 月報～

No. 6



先月から一般開放された矢並湿地に生息する
サワギキョウ (1998年10月2日 白金晶子 撮影)

*** 矢作川のさまざまな生き物 ***

冬のヨシ原の主役オオジュリン

真野 徹

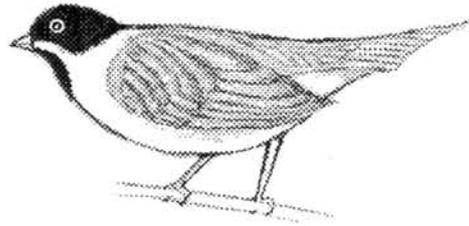
愛知県では10月中旬に入ると海辺などの、ヨシ原にホオジロの仲間のオオジュリンが北方の繁殖地から渡ってきます。10月下旬から11月初めが渡りのピークです。その頃にはヨシ原の中はオオジュリンでごった返しています。けれども、それほどたくさんいるようにはみえません。冬羽は枯れたヨシに似た色をしているからです。越冬地のオオジュリンは山地の森林では全く見られず、主に海辺や川、湖岸などのヨシ原に生息しています。日本各地で、多くの人が環境庁の許可を受けて、

これらの鳥がどこから来るのかを調べるために、捕獲して足輪をつけています。この調査を鳥類標識調査といいます。調査を始める前までは、生息環境から推測して、太平洋岸沿いを南下し、愛知県に渡来しているものと考えていました。しかし、愛知県で見られるオオジュリンの半数以上が日本海側の新潟県から内陸の長野県を経て渡来しているのが分かりました。信濃川や天竜川などの川沿いに渡っているようです。その他は太平洋岸沿いに南下している鳥です。オオジュリンの繁殖地は

主に青森県より北です。日本地図を広げ、青森県から愛知県へ定規を当てると新潟県と長野県を通るのが最短コースなのがよく分かります。

オオジュリンは生活のほとんどをヨシ原で過ごします。他にヨシ原で過ごす鳥にはチュウビ、ヨシゴイ、クイナ、オオヨシキリ、コヨシキリなどたくさんの種類があります。近年、全国的にヨシ原がほとんど見られなくなりました。護岸工事や埋め立てで姿を消してしまったのです。ヨシ原に生息する多くの生き物達の行く末が心配です。古く万葉の時代の日本は「葦原の瑞穂の国」と言われました。昔はヨシ原が広がりさぞかしオオジュリンもたくさんいたことでしょう。

(まのとおる、環境科学株式会社・豊田市矢作川
研究所 共同研究員)



オオジュリン (オス夏羽)

◆◆◆ ビルカバンバのリオ・グランデ ◆◆◆

古川 彰

エクアドルのほとんどペルー国境に近いビルカバンバ村は長寿村で世界中に知られている(らしい)。私が医学調査団にくっついて、車で1日かけてその村を訪れたときにも、126歳という老人があらわれてびっくりした。ともかく、赤道に近いけれど高度が1500メートルほどあって風光明媚な村だった。いい空気といい水が長生きの秘訣だったはずなのだが、最近はどうもそうではないらしい。

ビルカバンバ村を流れている川の名前はリオ・グランデという。とにかく村の中で一番大きな川のことをそういうのだからスペイン語圏にいくつリオ・グランデがあるか測り知れない。まあ、とにかく川のことを調べているものとしては川の様子を見に行こうと、さっそくでかけてみることにしたのだが、どこから川におりていいものか分からないほど両岸は雑草に覆われている。

仕方がないので、近くの家で洗濯物を干していた女性に、川のことを聞いてまたびっくりしてしまった。この川は洗濯もできないほど汚くなってしまったので、みんなあまりおりなくなったのだそうだ。川が汚れはじめたのは十年ほど前に外国の援助で水道ができて、みんなが川に排水を流すようになってからだそうだ。いまは下水道の話もでているけれど、それもなかなか進まないからま

すます川はダメになる、とその女性は川に私を案内しながら説明してくれた。川に降りてみるとさほど水が汚いようでもないし、さっきまで彼女はここで洗濯をしていたという。アレッと思っ、もうすこし詳しく聞いてみて分かってきたのは、つまるところこういうことだったらしい。

十数年前から冷蔵庫やガスレンジやらが台所に入ってきて便利になったのに水だけは川から汲んで、溜めておく暮らしがしばらく続いた。けれども、どう考えてもそれは矛盾しているし、水を汲むのも大変な仕事だ。しかも川の水は衛生的でないという噂もどこからか伝わってくる。ということで、水道ばなしが飛び出すのは時間の問題だったらしい。それやこれやで水道をひいてみたらいままでの川の暮らしはなんと不便だったのかと思ひ知らされているというのが率直な感想のようだ。

ただ水道はお金がかかるから洗濯だけはね、と笑いながらその女性は言っていたけれど、琵琶湖でも同じような話を聞いたことを思い出して、リオ・グランデと長寿村の行く末に些か感傷的になったのでした。

(ふるかわ あきら、中京大学社会学部 教授・
豊田市矢作川研究所 共同研究員)

XXXXXXXX よりよい川づくりを目指して XXXXXXXX

宮田 昌和

平成9年6月に河川法の抜本的な改正が行われ、河川法の目的に河川環境の整備と保全が位置付けられるとともに、地域に密着した共有財産である河川の住民参加による河川整備の計画制度が導入された。

古来より、河川は地域独自の自然環境や景観を生み出す役割を果たし、そこにかかわる人々が築き上げてきた独自の文化を生み出してきた。人間社会に灌漑や舟運、時に人の心を癒すなど様々な恩恵をもたらす一方、想像を絶するような洪水や渇水により、人間の生命や財産を奪うものとして存在してきた。このため先人達は利水と治水という面で幾多の困難に立ち向かいながら川と付き合い、この努力によって社会基盤が整備され、今日の著しい経済の発展を伴い安全で安心できる生活が可能となった。しかし、近年の河川事業の大規模化、経済性と安全性を優先してきた経緯、治水と利水に支えられた都市型の人々の暮らしにより河川を人から遠ざけ、河川が本来持つ様々な役割を見失なう結果となってしまった。

こうしたことから、河川行政も新たな認識のもと、平成2年に建設省から「多自然型川づくり」の推進に係る通達がなされ、河川整備に環境へ配慮することが明確にされ、多くの河川で取り組まれるようになった。また、平成6年に「環境政策大綱」が交付され「環境」を建設行政において内部目的化を基本とすることを位置付けた。そして、冒頭の河川法の改正が行われ、21世紀に向けて河川行政が大きく転換した。



加納川（加納町）。平成3年度に改修を終了。

豊田市においては、スイスやドイツで行われきた「近自然河川工法」を日本に紹介されていた（株）西日本科学技術研究所の福留脩文氏から指導を得て、早くから自然に配慮した川づくりを行ってきた。

それは、多くの技術者が勘違いしている石や木材など、自然材料を使えば自然を生かした川づくりであるという考え方ではなく、技術もさることながら、その根底には「すべての生命の尊厳」という哲学的な思想があるということを教えられた。

そこから生まれた河川課の現場が、加納川、^{だい}太田川、五六川（児ノ口公園）などであり、古鼠水辺公園やお釣土場水辺公園などの矢作川における環境整備である。個々については機会があれば紹介する。



^{だい}太田川（大内町）。平成5年度から改修を継続中（12年度に終了予定）。

今日まで人間社会を守るために発展した高い土木技術は、今後はそこに哲学的な価値観を与え、さらに高度な土木技術によって、経済的発展と自然界のあらゆる生物のために応用していかなければならない。今のわれわれ土木技術者に求められている使命である。

（みやた まさかず，豊田市役所
土木部河川課 主査）

矢作川の水辺

村山 秀夫

私ども昭和初期生まれの年代は、川と言えば清流が頭に浮かんできます。今現在の子供、小学生も川と言えば清流と思いきこんでいるようだが、現実の川は清流とは大変かけ離れていると思われま

す。豊田市の中心部を流れる矢作川も、半世紀前の水辺（特に平戸橋下流）はその面影もなく、大変な変わりよう環境の悪さが目立つようになりました。

高度成長期から低成長の波の中で、近年行政サイドも自然環境に目をむけるようになりました。自然の豊かさが取り戻されつつあり大変喜ばしいことであると思います。地域住民も自然環境に目を向け始めましたが、遅きに失した感があります。

平成4年、矢作川環境整備の一環として愛知県豊田土木事務所の護岸工事が、扶桑町地区の800mの区間で施行されました。特筆すべきことと思いますが、豊田市、矢作川漁協、地元住民の声を取り入れ、他に類の無い立派な散策道の付いた公園風の護岸工事が完了したのです。

この水辺は扶桑町にとって古き歴史の地でもあります。この良き水辺を自治区の有志で管理する話が持ち上がり、元の町名である「古鼠（ふっそ）」を復活させて、古鼠水辺公園と地元民の合意で命名致しました。現在の平戸橋下流約200m、水辺公園の中段に旧平戸橋があり、20年ほど前には川の中央に当時の橋脚の材木が4～5本残ってしまし

た。この場所は昔矢作川の最北端の川の港として海産物、林産物を取り次ぐ要所であり下流から帆掛船が来たそうです。川船から引き揚げられた物資は牛・馬車によって遠く信州飯田や名古屋方面に運送されました。

当時の善光寺道、名古屋への道標も今現在残されています。

この地点の平戸橋が流失して、明治28年、現在地に掛け替えられ、その後大正2年の改築で鋼路橋はトラスで床は板張りで幅員は3.6mでした。

現在の平戸橋は昭和11年竣工で橋は鉄筋コンクリート床板、橋台、橋脚は以前のままのものでコンクリート巻立てで、橋の施工代金は金71,900.18銭と記されています。

次に、現在の水辺公園の管理について少し触れてみたいと思います。

愛護会の会員は35名で、当初は自治区住民の憩いの場としての管理が目的でしたが、5ヶ年を過ぎた現在は思ってもみなかった大勢の水辺公園の利用者に嬉しい悲鳴を上げています。4月下旬より9月下旬まで利用者があり、特に夏休みともなれば多い日には200～300名の人でいっぱいです。今思えば当初の2年間は大変な苦勞の連続でした。今は会員の努力により、汚れが目立たない良好な状況を保っています。会員の皆さんの尽力に感謝致しております。



早春の古鼠水辺公園



公園の管理作業を終え、一息つく人々

夏休みのある日、ゴミの持ち帰りを利用者にお願ひして廻った時のことですが、名古屋市からの5名の家族、大人は50才前後で子供は小学生でしたが、奥さんいわくこんな環境の良い場所で子供の前でゴミは持ち帰って下さいと言われた事、学

校で学ぶ社会科よりも身をもって体験した事、大変な勉強になりましたと感謝の言葉を受けました。

愛護活動に希望と勇気が湧いてきました。

(むらやま ひでお, 古鼠水辺公園愛護会 会長)

第7回 国際生態学会 (INTECOL) に参加して

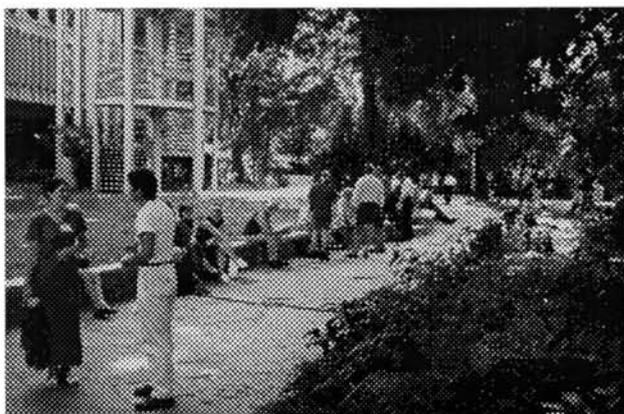
洲崎 燈子

もう2ヶ月以上前の話になりますが、去る7月19日(日)～25日(土)、イタリアのフィレンツェで開催された第7回国際生態学会 (INTECOL) に参加してきました。

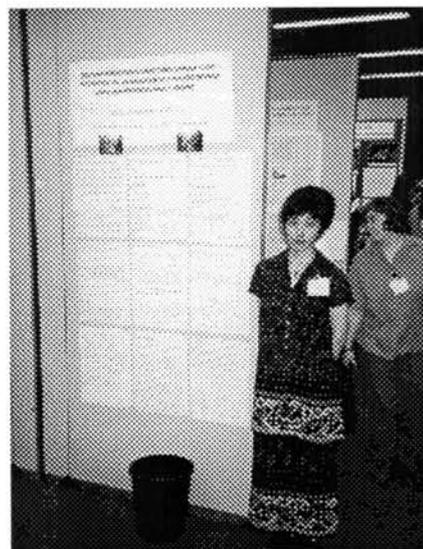
会場はフィレンツェの中心部にほど近いサンタ・マリア・ノヴェッラ駅隣の国際会議場で、数十ヶ国から2000人以上の生態学者が集まりました。19日はレセプションと開会式が行われたのみでしたが、20日から25日の間は朝8:30から夜7:00まで約20の小会議室でのテーマ別のシンポジウ

ム、大会議場での全体セッション、そしてポスター・セッションというハードな日程でした。

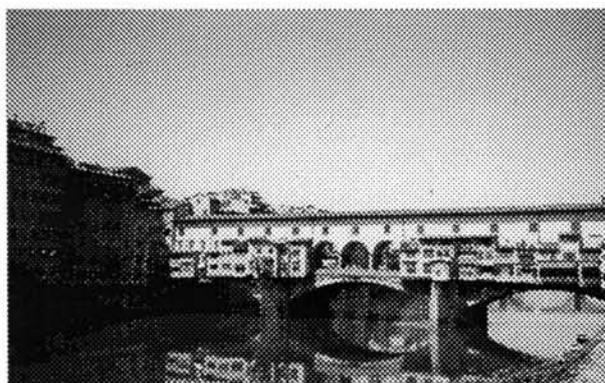
私は自分の専門(里山研究)と関連のある植生の変化、植物群落の分布と相互作用、保全生態学、景観生態学、そして河川を含むウェットランド全般の生態と保全に関するセッションをはしごしました。こういったセッションは前々回(国際生態学会は4年に1度開かれるので8年前)、横浜プリンスホテルで行われた大会の時より随分増え、時代の変化を感じさせました。全体セッションでもフ



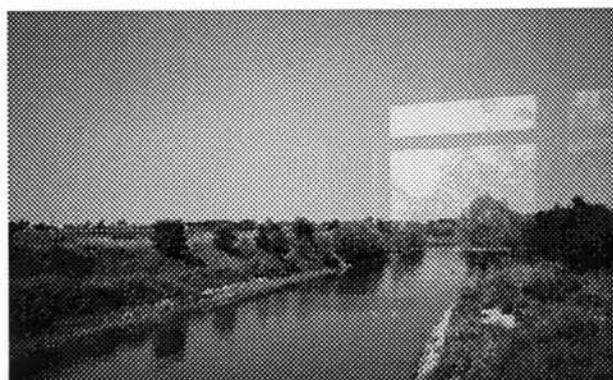
国際会議場の前。ラフな服装の人が多い



ポスター前で記念撮影



市内を東西に流れるアルノ川と
名高いヴェッキオ橋



トスカナ地方の小河川(車窓から)

